

春子の人形

夜おそく、私の店の前で赤ン坊の泣く声があるので、父が出てみると赤ン坊が捨ててあった。昭和六年の三月、四国の松山に近い町のことである。

「ま、女の子……」

寝間着姿の母は、ともかくオシメを取りかえてから、ゆつくりと抱きあげた。

「可愛い顔して」

深々と柔らかい母の懷に抱かれた赤ン坊は、もう泣きやんでいた。

「これしか置いてなかった……」

父は赤ン坊と同じぐらいの、大きな日本人形を手にしていた。おかつぱ髪の女の子の人形である。

警察には届けたが、思いかえして名のり出てくる人もなく、結局は、赤ン坊はうちで育てることにした。

「お遍路さんが置いていったんじやる……」

私の家は遍路みちに面した商家で、過去にも一度捨て子があった。その時の赤ン坊は男の子で、うちで育てていると二年目に母親があらわれた。遍路姿の人だった。

「……一緒に連れて死のうと決めていたんですが、あんまり可愛い顔をしておるので、どうしても連れて行けず、繁昌しているお宅の店の前に捨てさせて頂きました」

独り身になった母親は瀬戸の海へ飛び込んだけれど、夜釣りの漁師に助けられた。

こうなったら、歩きに歩いて行き倒れて死のうと遍路みちをひたすら歩きはじめると、ひどい咳も収まってきた。痩せこけた体にも肉がついてきた。女は結核だった。その頃は結核は業病とされており、可哀そうに女は子供を連れて離縁されてしまったのである。

「お大師さまのお蔭で、このように元気になりました」

と、男の子を再び抱きかかえ、何度も合掌しながら遍路みちを遠ざかって行ったものだ。

温暖な風土で、新鮮な空気と、果実に恵まれた四国を歩き続けて、結核は治ったのである。

そんなわけで、女の赤ン坊も何年かして引きとりになるかもしれないなかった。

二度目の捨て子は、三月にうちに来たので、春子となった。

五歳だった私は、突然にあらわれた可愛い妹を嬉しくてたまらない。

「……本当のお母さんが、連れかえしに来なければいい」

女の遍路が店先に立つたびに不安だった。

しかし、三年たっても、五年たっても春子を捨てた母親は、あらわれなかった。

春子が小学校にあがる時、もう実の親はあらわれないうと、うちの戸籍に入れた。

赤ん坊の時から、春子は私と一緒に寝ていたが、いつも人形と一緒にである。枕許まくらもとに置いてあったり、並べて布団の中に寝ていたりもした。

そんなわけで人形の着ている着物は汚れが目立つようになったが、私の母は新しい人形とにかえることはしない。新しい着物に着せかえることもしなかった。

「……あのお人形は、春子の親が置いていった人形じゃから」

しかし、春子が捨て子であることは、絶対の秘密である。店の者にも、近所の人にも、それだけは念を押して頼んであった。

春子はもう汚くなった人形を、抱いて寝ることはなくなった。

「お乳が痛い……」

春子の乳首のまわりが、はれたようにふくらんでいる。

「春子は女の子じゃけん、それでええんよ」

と母は言っ、その日から、春子は私と別の部屋で寝るようになった。

汚くなったけれど、毎年三月の雛祭りには春子の人形は雛壇に飾られた。七段の雛壇が座敷の床の間一杯に飾られて、姉も居たせいもあって、わが家の雛壇はボンボリが六灯も灯り、夜

も華やかだった。春子の人形は尺五寸の人形なので一番下段の右脇に坐らせてあった。

「春子の人形は、なんか気味悪いなあ」

「気味悪い!？」

「……………」

「どうしてよ」

まずいことを言ってしまった。

「ねえ、どうしてよ」

「…………一晩中、目をあけて坐つとる」

夜、寝る時は雛壇のボンボリは二つにする。深夜、座敷で音がするので、あるいはネズミがそなえ物をねらっているかと思っ、入っ、と、ネズミはいなかった。大きな春子の人形が、じつと私を見つめている。

そつと雛壇から春子の人形を抱きかかえて部屋に持っ、帰った。一晩、私の部屋において、朝早く雛壇にかえしてやるつもりだった。

目がさめると、人形がなかった。きつと、母が私を起こしに來て人形を見つけ、黙っ、雛壇にかえしたにちがいない。しかし、私はそれを確かめるわけにはいかなかった。なぜなら、春子の人形は私の枕許に置いてあったのではなく、私の布団の中にあっ、たからである。

戦争が激しくなって、私は海軍兵学校へ入学することになった。まだ戦場へは出向かないが、空襲の激しい中で、長い別離となってしまいかもしれなかった。

「お兄ちゃん……」

春子は私のことを、そう呼んでいた。

「元気で帰って。死んだりしたら、いや」

「ばか、学校へ行くだけだ……」

春子は女学校に入っていた。大柄で色の白い、綺麗な女学生になっている。

母が、私を別室に呼んだ。

「……お前は、春子が好きかえ？」

「……………」

「ほんとに好きじゃつたら、兄妹きょうだいでないことを言うてやらにやいけん」

「どうして……」

「あの子も、……お前のことが好きらしい。ほんとに好きらしい」

「戦争で死ぬかもしれないのに、そんなこと……」

「死ぬかもしれないから、ちゃんとしたいのよ」

母は珍しく、強い声をだした。

「……母さんに、まかせろ」

私は海軍兵学校へ入学した。分校の長崎県だった。空襲がはげしくなって、七月、山口県の防府に移った。八月、春子が面会にくるといふ手紙が来た。

「こんな空襲の激しい時に、来るのはよせ」とすぐに手紙を出した。何しろ昭和二十年の夏である。

——春子は死んだ。それも広島で。八月六日の朝、原爆の光をあびて死んだ。広島駅で九州行きの列車を待っている時だったらしい。

「なぜ、春子を一人で出したんだ」

私は母をなじった。

「どうしても、あの子がお前に会いたいと言うて……。会うて、どうしても話したいことがあると言うもんだから……」

母は、春子が捨てて子であることを話したそうだった。だから、お前はお兄ちゃんをほんとに好きになっても、ちっとも構わんと、言ったそうだった。

「……春子は、どうだった？」

「そりゃア、びっくりしてたけど、でも、嬉しそうだった。お前のこと、ほんとに好きになってもええと判って、ほんとに嬉しそうだったよ……」

春子は、私に何を言いたくて、空襲の激しい中を防府に向かったのか。

春子の死んだ翌年の雛祭りにも、春子の人形は雛壇にあった。しかし、新しい着物に着がえさせた。ところが人形を裸にした時、なかから一円札が出てきた。春子の産みの母が入れてあったものだろう。

……人形の胸のあたりに四つに折って入れてあった。